

「花の芽出しに関わって」

暮らし
ポイント

「育苗箱を子供の目線で合わせて置いた」 5歳児Ⅰ期

安心
充実
“いま”を
充実

保育エピソード

花の種まきをするにあたり、芽が出る様子が保育室のすぐそばでいつでも見ることができるよう、育苗箱を子供たちの目線でテラスに置いておくことにした。

マリーゴールドの種は一人ずつすじまきし、アサガオとフウセンカズラはグループごとにばらまきし、霧吹きで水やりをすることにした。

登園後、いつもすぐに霧吹きを手にして芽が出ているか気にして見ていたり、自分のタイミングで様子を見に来て、土の表面を触り「乾いているから」と水をやったり、通る度に水鉄砲のようにあちこちに水をかけていたり芽が出るまでの関わり方は様々であった。

芽が出始めると、「芽出てる!」と喜び、友達や教師に知らせたり、何本出たかを比較したり、種の殻が破れて芽が出ていることを見つけて驚いたりしながら、霧吹きの順番待ちになるほど、水やりをしようとする子が増えた。

A児が「いつも(芽が)出るところが見れない」と言い、B児がその言葉に頷き、「いつ出ているのかな」「そうだ、カメラで撮っておいたらいいんじゃない?」と側にいた私に同意を求めするように言った。昨年度花の苗を食べる生き物の正体を探るため、畑に設置したカメラのことを言っているのだと分かった。そして、どうやら自分たちが園にいない夜間に芽が出ているのではないかということになった。

植え替えのタイミングを見計らっている間に、双葉と本葉の形の違いに気付いたり、「そろそろお引越した方がいいんじゃない?」と茎が伸びて生長していることを言っていたり、「葉っぱじゃなくて土にあげるんやで」と水やりの仕方を友達に知らせていたりする姿があった。また、そこに蒔いたはずの芽がなかなか出てこない心配し、「水やってたのになあ」と思いを巡らせている子もいた。



考察

生活の動線に育苗箱を机の上に置いたことで、子供がいつでも様子を見に行き、友達とその情報や気付きを共有していた。

登園時の通路付近でもあったので、生長具合を保護者に伝えていたり、芽の様子を一緒に見たりしていた。

…○花の生長に期待と関心をもつ

芽がいつ出ているのかという問いをもち、今までの経験から調べ方を思いつき、友達に伝えていたり、芽が出ないことを比較しながら生長には何らかの条件があることを感じたり等、子供たちそれぞれの豊かな感性が想像し、考えることにつながっている。

…○気付きを共有し考えている

一斉活動で種を蒔いた後、継続して関わることでできる場になっていたことで、進んで水やりをしたり、友達と誘い合って様子を見に行ったりして生活のルーティンや楽しみになっていたようだった。

…○身近に感じる

だいじ



“これから”を生きぬく力を育む「環境と暮らし」

昨年度の子供たちが残してくれた種であることに重ねて、私たちが植物の生長(循環)に関わっていることを子供たちに伝えたことで、お世話をしないとという責任感のようなものを感じていた子供もいたように思います。

芽が出ることで新たないのちが生まれるといううれしい感覚を友達と共有し、自分たちが育てているお花という意識をもっていました。この後、咲かせる花に対する思いや関わり方の変容に期待したいです。また、身の回りのすべての植物に同じような生長の過程があったり、誰かの思いが込められていたりというような、想像力を働かせることも楽しめる栽培活動にしていきたいです。

「スイレンのつぼみ」

暮らし
ポイント

「看板作りをし、置いた」

5歳児 I期

安心
充実
“いま”を
充実

保育エピソード

個人持ちの小冊子の図鑑を手にみんなで園庭へ散歩に出た。ページをめくりながら自然物を探しまわる中、ビオトープ周りには大勢の子供たちがしゃがんでいる。いつもなら虫探しをする子供たちがせわしく動きまわるのだが、今日はみんなで静かに水面を見つめるひと時になった。「小さい虫がいる」「アメンボのあかちゃんって、大人と同じ形をしているね」などと思い思いに目にしたことを口にしていると、「葉っぱが増えてる!」とA児。スイレンの株も植栽としてビオトープに馴染み、生長しているようだ。A児はずっと前から図鑑にスイレンが載っているのをみつけていて、一人でビオトープに来ては様子を見ていたようだった。

数日後、スイレンのつぼみがちぎれていた。前の週に“つぼみができている”という話題が駆け巡り、初めて出会うことになるこの花に、「咲くのが楽しみだね」とクラスみんなで見に行ったところだったのに。このことは子供たちにとってはちょっとした事件だったようで、突然に話し合いが始まる。「アメンボかも」「カエルかも」「誰かがやったんと違う?」等とそれぞれにちぎれた理由に思いを巡らせていたが、「お知らせの看板を作ってビオトープの横に貼っておいたらどうかな」と言うB児の意見に落ち着いた。

翌朝すぐに数人の子供たちの中で看板作りが始まった。“お花が咲くから大事にしてね”“つぼみを取らないでね”など思い思いにメッセージをしたためるとビオトープの脇に掲示をしに行った。「なにやってるの?」と聞きに来た4歳児の質問に説明する様子は真剣そのものだった。それからは、新しくできたつぼみが無事に花を咲かせるのを見届けようと毎日ビオトープへ様子を見に行き、その日を心待ちにしている。



考察

普段は保育室で遊ぶことが多いA児がスイレンのことをいつの間に見ていたのだらうと驚いた。ビオトープでは生き物に興味をもちがちだが、子供によって気づいたり発見したりすることは違う。多様なものの育つ場としての魅力を子供は感じ取っている。

…○目にしたものに心を奪われる

つぼみがちぎれるという予想もしない出来事が起こった時、どうしたらいいだろうと思いをだし合い、自分たちができることを考え友達と一緒に行動に移している。

…○何とかしたいと向き合っている

スイレンの葉やつぼみに思いを寄せたり、友達や教師と一緒にその思いを共有したりしながら自然物と心を通わす体験をしている。

…○大事なものだと感じている

だいじ



“これから”を生きぬく力を育む「環境と暮らし」

自分たちの思いを表す看板を作ったことで、(もう安心、大丈夫)と納得できたのか、子供たちの心の揺れも落ち着いたようでした。看板の存在は、そこに訪れたみんなの目にするところとなり、楽しみに思う仲間がいるということも周りに知らせることが出来ました。なかには、描くことそのものを楽しんでいる子供もいて、込めた願いや思いはそれぞれでしたが、その子なりに友達や教師と一緒に設えた充足感が味わえたのではないかと思います。ビオトープは日を追うごとに生き物が棲みつき、草花が伸びて豊かに姿を変えていきます。子供たちは生活しながら触れていくなかで、“生き物が暮らす場所”として大事に思う気持ちを育んでいるようです。

「ビオトープをめぐる生き物」

暮らし
ポイント

「飼育ケースを子供の共有スペースに置く」

5歳児 II期

安心
充実
“いま”を
充実

保育エピソード

毎日熱心に水面をのぞき込んでいるA児。見つけたオタマジャクシをつかんで飼育ケースに入れ、得意げに保育室に持ち帰ってきた。以前、他の子がオタマジャクシをつかんだ時は、「ビオトープの生き物がいなくなる!」と取り出すことに否定的だったはず。教師がそのことを聞くと、A児は「だって育てたいんやもん」とニヤツと苦笑い。生き物好きなA児の気持ちに私自身も共感するところがあり、受け止めることにした。それならばせっかくなのでみんなも見られるようにと保育室前のテラスに机を用意すると、周りの子供たちもそれぞれにビオトープでつかんだアメンボやヤゴが入った飼育ケースを並べはじめ、テラスの一角が生き物コーナーになった。

生き物コーナーでは、写真絵本を熱心に眺めては、飼育ケースのオタマジャクシと見比べながら育っていく過程を確かめている。A児、B児、C児らは、その成長に気づくたびに周りの友達や教師と伝え合い、一緒に見ることを楽しみにしている。

A児がビオトープでオタマジャクシの飼育ケースの水替えをしている。「つかんだところと同じ水がいいねんで」と様子を見に来た私に告げると、持ってきた小さなお椀やお鍋を使って手際よく水替えを進めていた。そばでしゃがんで見ていると、「こんだけぼくが育てたんや」とお椀の中で揺らめくオタマジャクシを見つめながら満ち足りた笑顔でつぶやいた。D児らが園庭に飛び交うトンボをつかんでいると片付けの時間になった。飼育ケースを持ったD児が「トンボが気に入っているところに逃がそう」とビオトープへ行き、蓋を開けた。その後、「またここに飛んでくるかもしれん」と放たれたトンボたちの行先に期待するように息をひそめてビオトープを遠巻きに眺めていた。



考察

共有の場であるテラスに飼育ケースが集まったことで、今まで知らなかった生き物に出会うきっかけになったり、友達と一緒に生き物の生態や不思議さについて発見や驚きを共有したりする場となっている。

…○いろいろな生き物を身近に感じる

自分で世話をし、育つ過程を実感として味わい、手応えを感じながらより愛着をもって生き物と関わっている。

…○大事にしたいと思い行動している

毎日の遊びで生き物に触れていくなかでトンボがビオトープに卵を産み付け、孵化したものがヤゴだということが分かっていた。どうすることが生き物にとって良いのだろうか気持ちや考えを寄せたり、大事に扱おうと行動したりしている。

…○知識を活かそうとしている

だいじ



“これから”を生きぬく力を育む「環境と暮らし」

ビオトープは、昨年度四歳児だった頃から、周りのたくさんの人たちの知識や力を借りながら造り上げられてきました。出来上がっていく過程を間近で見たり、自分たちにできる手伝いをしてきたこともあり、子供達にとっては身近な環境として生活の中に位置づいているようです。

いつも誰かが水面を覗いていたり生き物をつかんでいたりするビオトープ。いろいろな生き物が暮らす場所として、これからも四季を通じて子供達が感覚や捉えを豊かに深め、変容していくことを楽しみにしていきたいです。

「ビオトープの生き物への関心①」

暮らし
ポイント

「デジタル顕微鏡で調べる」

5歳児Ⅲ期

保育エピソード

ビオトープで捕まえたヤゴとメダカが入った飼育ケースを子供たちが代わる代わる覗いていた。そして、「あ、メダカ食べた!」とヤゴがメダカを食べる瞬間を子供たちは目の当たりにした。あまりの素早さに衝撃を受けたようで、側にいた子供同士で「ヤゴがメダカ食べた!」と興奮して伝え合っていた。私は、メダカが食べられてしまったと感じ、同じケースに入れていたのを分けておけばよかった(勉強不足だった)と思ったが、子供たちの方が客観的で、ヤゴがエサとしてメダカを食べたという事実を受け止めているようだった。

数日後、ヤゴへの興味関心が広がったのか、A児、B児と他2人がビオトープで捕まえてきたヤゴをバケツの中に入れていた。バケツには、アサガオの紫色の色水が入っていたので、私が何をしているのか尋ねると、「ヤゴが色水飲んだら、お腹の色が変わるかなと思って」と、A児が答えた。私はびっくりしたが、ヤゴは動いていたので、それなら顕微鏡で見てみようと言った。ヤゴがメダカを食べたことが衝撃的だったので、子供たちは、新たに捕まえたヤゴのお腹がどうなっているか、知りたくなったのかなと思った。チャック付きのビニール袋を使って観察することは、教師が虫の生態について学んだことを子供たちに伝授していたので、今回もビニール袋にヤゴを入れてみようと言った。ビニール袋ごとひっくり返して顕微鏡で映してみると、確かに、お腹が赤いように見えた。A児らは「やっぱり、飲んだんや」と納得したようで、逃がしに行こうとヤゴをバケツに戻しすぐにビオトープへ向かった。



考察

ビオトープでの生き物採集で、ヤゴはメダカよりも後に発見し、子供たちにとっては珍しく貴重な存在だった。ヤゴの生態の未知なところに関心をもち、友達と捕まえ、観察しながら自分なりの考察を共有していた。また、顕微鏡で調べることで、ビオトープにいる生き物の世界を覗くことができ、知らなかったことに出会ったり、予測が確信になったりしており、顕微鏡が子供たちの思考ツールの一部となっている。

…○知りたいと思い、予測して調べる

アサガオの色水の中にヤゴがいた経緯や一人一人の思いを丁寧に聞き取れていなかったが、ヤゴがビオトープに住んでいる生き物であることを子供たちは認識していた。飼育するつもりはなかったため、すぐにビオトープにヤゴを逃がしに行ったのではない。

…○生き物の生態に関心をもち

いのち



“これから”を生きぬく力を育む「環境とくらし」

ビオトープにはいろいろな生き物が存在し、関わって生きていることを、これからも子供たちと共に敏感でいたいと思います。同時に、私たちがビオトープで生き物採集をするというような働きかけによって、生き物の生態が何かしら変化するということが自覚しながら、ビオトープのある暮らしを楽しんでいきたいと思っています。

顕微鏡を使うことについては、自分たちが調べたいからということだけでなく、その際の生き物の状態などにも子供たちと一緒に問いをもち、思いを馳せていくことが、生き物とも共生していくという意識につながると思います。

「ビオトープの生き物への関心②」

暮らし
ポイント

「生き物を観察する場を設える」

5歳児Ⅲ期

トライ
“いま”と
“これから”をつなぐ

保育エピソード

ビオトープで捕まえた生き物を飼育ケースに入れて観察しながら、ビオトープの水で水替えをしたり、水替えをしようとしたけれどやっぱり逃がしたりと生き物との関わり方は幼児それぞれである。私も生き物がどうなっているか一緒に観察しながら「大きくなっている」とか「ビオトープの水には栄養がいっぱいあるから」という子供たちの捉え方になるほどと共感し、感心しながら、関わり方は任せていた。

A児はビオトープで捕まえたメダカをしばらく飼育しており、ある日、元々保育室内で飼育しているメダカ用のエサをこのメダカにもあげていた。B児が捕まえていたメダカの飼育ケースを見ながら、「メダカにエサあげてもいい？」と聞いてきたことで、先にA児もエサをあげていたことが分かった。私は、「このメダカはビオトープにいる時には、エサあげてないよね？お部屋のメダカはずっとお部屋にいて、お水は水道の水やねん」と言うと、それを聞いていたC児が「ビオトープの水は栄養がいっぱいやからエサあげなくてもいいねん」と言った。A児もそのやりとりを聞いていたようなので、私はあえてそれ以上言わなかった。

数日後、A児が水換えをしようとした時、二匹いたメダカの一匹が死んでいた。A児が落ち込んでいるような表情に見えたが、「ビオトープに逃がしに行く、こっちはビオトープに入れたら何かの栄養になるかな」と私に言った。そして、飼育ケースを持って、ビオトープに行き、流し入れた後、しばらく様子を見ていた。



考察

A児は保育室でできるだけ長く飼いたいと思っていたようで、水替えをする時にメダカが死んでしまっていることは思ってもいなかったようだった。どうしようという葛藤の思いの中にメダカにとってどうすることがいいのかと考えたようだった。

…○思いや考えを巡らす

以前、数日間カエルの死骸がビオトープの中にあり、骨だけになっていた出来事があった。A児にとっても印象深く、死んでしまったメダカ=何かの栄養と考えたのではないかな。しばらく様子を見ていたのも、ビオトープに放した2匹のメダカがそれぞれどうなっていくのか確かめていたようだった。

…○経験をつなげて考える

いのち



“これから”を生きぬく力を育む「環境とくらし」

生き物を飼育することは子供たちに経験させたいことだが、生き物の住処を人間が変えてしまうと、生態系が変わったり、生き物がその生き物らしくいられなかったりすることにもつながるということを、子供たちと一緒に感じ、考えていきたいと改めて思いました。

死んでしまった生き物は土に埋めてお墓をつくることで、生き物の“死”と向き合うことができました。ビオトープという、多くの生態が存在する場で死骸が他の生き物のいのちに繋がるという循環を子供たちが実感したことは、“生”に向き合うことのように感じました。

「ダイコンの芽」

暮らし
ポイント

「タブレットを活用する」

5歳児 Ⅲ期

トライ
“いま”と
“これから”をつな
ぐ

保育エピソード

九月初旬、畑の畝にダイコンの種蒔きをした。ほどなく発芽し、みんなで水やりをすることが朝の日課になった。

三連休明けの朝。いつものように水やりに行こうとテラスで靴を履き替えていると、「先生！葉っぱがなくなっている！」と畑から大急ぎで子供たちが戻って来る。慌てて畑に行くと、無数にあった小さな芽が見事に無くなっていた。予想だにできなかった出来事に、じょうろを手を持ったまま啞然としている子供もいる。「カラスが食べたんじゃない？」「バッタじゃない？」と口にする姿もあった。答えが分からないまま、“どうして？”“何かにやられたらしい”というもやもやした思いを抱えた一日のスタートとなった。

降園前、芽が食べられていた状況をタブレットで検索し、モニターで映してみることにした。みんなで興味津々にモニターを見つめていると、映し出された小さなイモムシを見てしんとなる。どうやら発芽したての柔らかな芽は、このシンクイムシと言う名のイモムシの格好のごちそうだったらしい。みんなも瞬時にそう受け止めたようで、A児は「こんにゃろー」と発しながらシンクイムシをやっつけるしぐさをして周りを笑わせていた。さらに対処方を検索すると“一度現れたらひたすら虫をとる”という情報も出てきた。

翌朝からは、誰ともなく畑でシンクイムシ探しが始まった。数日経つと、「どこにいるかわかるようになってきたで」「丸まった葉っぱのどこにいるんちゃう？」などと教え合いながら熱心に目を凝らし、ダイコンの芽を観察するようになった。寂しくなった畝には、みんなで余った種をもう一度蒔いて育て直しをすることになった。



考察

今までいろいろな野菜や花の種蒔きを経験し、当たり前のように発芽し育つだろうと思っていた矢先の事だった。発見したことを教師に伝えに来たり、友達どうして思ったことを話したりしている。

…○思いがけない出来事に戸惑い、感じたことを伝え合う

その日にICTを活用したことで関心をもって見ていた。また、シンクイムシの存在を初めて知り、原因が分かったことが安心や納得につながっている。

…○みんなで見て共有する

本当にシンクイムシがいるのかと畑に行ってみて、見つけ方を友達と伝え合い、共有している。

…○自分たちの目で確かめる

だいじ



“これから”を生きぬく力を育む「環境と暮らし」

子ども達の戸惑いや驚きを自分ごとのように受け止めながら、それに応える方法としてICTを活用してみることにしました。その後は、芽や葉をよく観察したり、雑草引きを進んでしたりと、より熱心に世話をするようになりました。“ダイコンにもこんなことが起こるんだ”と心を揺らし、分かったことが栽培への興味や関心を深め、自分たちで守ろう、育てようという思いをさらに強くしたのではないかと思います。また、捕まえたシンクイムシも、畝に置いたり草むらに移したりしていました。迷いや葛藤もあったでしょうが、同じように命あるものとして生かしておくという扱いをする様子を見て、子供達の思いの中に共に暮らすという素地を感じ、大切に受け止めたい姿だと改めて思いました。

「だいじなビオトープ」

暮らし
ポイント

「観察したいという思いが実現する状況作り」 5歳児V期

創造
“これから”に向けて

保育エピソード

冬休み明けの日、ビオトープには氷が張り、雪がちらつき薄っすら積もり始めていた。雪の止み間に、「ビオトープ、見てきていい？」と外靴に履き替えながら視線は既にビオトープを見ていたA児たち。数人が後に続いて飛び出して行ったので、私も急いでビオトープに向かった。「氷が出来てる!」「どうやって取る?」と足元を確認しながら氷の具合を探っていた。その後、砂場のスコップで氷を叩き割ろうとしている子に「強くしたら、メダカが死んじゃうで」と注意していたり、メダカが息ができないからと必死で氷を割っていたりしていた。流氷のように氷のかけらが水面に浮かぶと、「メダカ、いーひんな」「もっと下に隠れているんや」「もう、いーひんで」「水草の中に隠れているんや」「でも生き物はいるで」とそれぞれの思いが飛び交っていた。

A児はビオトープの氷を砂場のバケツで集めていた。保育室前まで8個のバケツを運び並べていたので、なぜここに持ってきたのか尋ねると、「氷が溶けて生き物が動いたら、またビオトープに戻すから」と答えた。私が「すごいな～、溶けたら生き物また、元気になるかな」と感心して言うと、「うん」と頷いた。

3連休明けの日、登園時にバケツの中を覗いて氷がどうなっているかを見ている子が数人いた。その後、A児とB児がバケツを囲んで話をしていた。2人に近づくと、A児が「干上がってしまう・・・」と早く水をビオトープに入れに行こうとB児を誘っていたのだった。両手にバケツを持ってビオトープへ運び、水を流し入れていた。バケツの底に残った土は、ビオトープの水をすくいかけ混ぜて戻していた。近くで見ていた年中児がビオトープの水が濁って見えなくなったと言っているのを聞き、A児は「大丈夫、しばらくしたら澄んでくるから」と答えていた。



考察

ビオトープにできた氷を触ったり集めたりしたいという思いが先行していたが、氷が出来ていたことで、その後はより生き物の存在に思いを巡らせていた。

・・・○思いを寄せて考える

A児は、これまでも雨が降らない日が続くと水が干上がるということを実感しているので、ビオトープの氷を持ってきたことで、ビオトープの水が少なくなってしまうということを心配していた。

・・・○ビオトープの状態に気付いている

ビオトープの水には、たくさんのいのちが含まれていることをこれまでの採集や観察で学んでいる。凍った水の中にも生き物が生息しているのではないかと予想し、期待していることが伺えた。また、溶けた水はビオトープに戻すことで生き物の生息場所やビオトープそのものを守ろうとしていたようだった。・・・○ビオトープを大切に思う

だいじ



“これから”を生きぬく力を育む「環境とくらし」

様々な生き物を採集して飼育したり、顕微鏡で観察したりしてきたこと、また、ビオトープ作りに関わってきたことから、ビオトープそのものをいのちが息づく場として大事に思うようになっていくようです。

ビオトープに氷ができたり、水が少なくなったりする自然現象が繰り返し起こっている中に私たちが存在しているというような感覚を子供たちの姿から得たように思います。

身近な環境への思いの変容を子供たちと一緒に実感し、自分ごととして考えていけるような暮らし作りを探求していきたいです。